

東日本大震災の現場から どうぶつ達と生きのびるために…

From the Site of the Great East Japan Earthquake, Surviving Together with Animals...



石巻市 あべ動物病院 獣医師・阿部 容子

Yoko ABE, Veterinarian, Abe Animal Hospital, Ishinomaki City

○阿部容子先生

よろしくお願いたします。只今、御紹介いただきました阿部容子です。

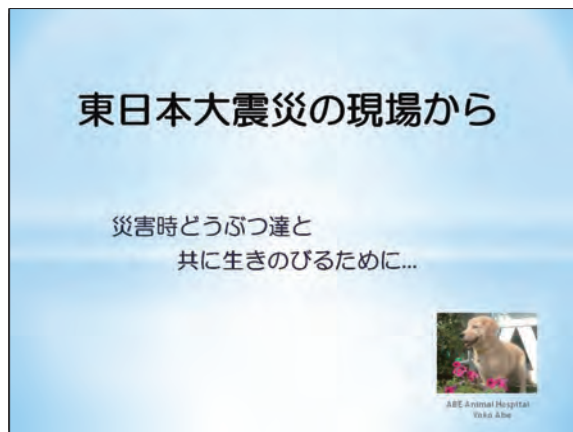
今現在も石巻では仮設住宅で動物たちと一緒に日常ではない不自由な生活を過ごされている多くの人たちがおります。その方たちにかわって、まずは、皆さんに本当にさまざまな御支援をいただいたことを心から感謝申し上げます。

それでは、災害時動物たちとともに生き延びるためにということでお話を進めてまいりたいと思います。院長の話と重なるところがありますが、3月11日14時46分、マグニチュード9.0、震度6強の巨大地震ということでしたけれども、私の住む石巻は、三陸沖です

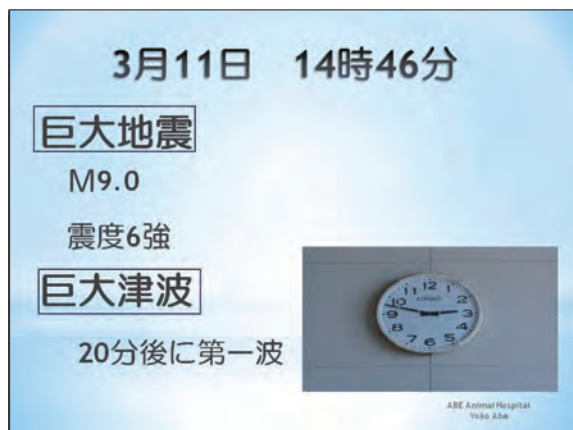
から、大変地震が多い地域であります。4年前、震度6強と6弱が1日の間に3回起こったことがありましたがそのときには、ほとんど何も倒れることなく、地盤が固いこともあり、被害はこれとってありませんでした。今回震度6強ということでしたが、3分間の揺れと、その間縦に揺れ、横に揺れ、とにかくこの世の終わりなのではないかと思うほどの恐怖を感じたのを記憶しています。自宅のほうは、食器棚とか、本棚とか、降ってくるように倒れてしまったという状況でした。ですから、実際は観測上は6強ですが、その破壊的なすさまじい揺れというのは、今までに経験したことのないものであります。

その後、地震だけであれば、何とかそこから復旧していくことはたやすくできたと思っております。しかしその後押し寄せた、先ほどもご紹介いただいたと思いますが、巨大津波が1波、2波、3波と押し寄せてきました。この時計を見ていただくとわかるのですが、震災後、避難所をヒアリングするため多くの学校を回りましたが、ほとんどの体育館の時計がこの3分間弱の間に、時がとまっていたのがとても印象に残っています。【スライド2】

現在の石巻です。南浜町といって沿岸部の住宅密集地域ですけれども、ここは今もって大潮の時期とか、時間帯によってはこのように水がすべて上がってくる状



【スライド1】



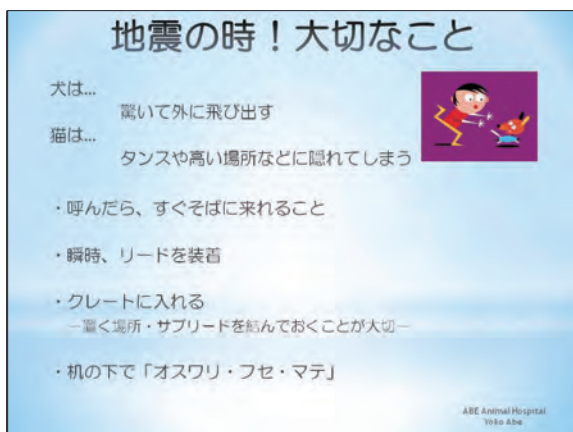
【スライド2】



【スライド3】



【スライド 4】



【スライド 5】

況です。このマンションを見ていただくとおわかりになると思いますが、ここは4階のアパートですが、4階上まで波が来ている。この上のところ、フェンスは取れませんが、中はがらがらの状態であります。これぐらい波が高かったということなのです。ここは女川町というところ。実際、手前のところは、駐車場でした。普通の駐車場で、こちらに普通にお店が建っていた場所なのです。しかし、地盤沈下が激しく、常にここは海の状態というような生活環境になっております。

【スライド 3-4】

私は犬のしつけインストラクターをやっておりますので、まずは、地震の際に大切なことは？ということですが、皆さんは、強い地震の際、様子をうかがうため、戸が開かなくなってしまうためなどと玄関の戸をあけるとか、何かしらアクションを起こすと思うのですが、その際に犬も驚ろきパニックになり、勢いよく外に飛び出してしまふ。このケースが大変多かったのです。お互い興奮してますので、呼んでも戻らず、そのまま後は津波が来るのを見ながら、もう逃げるしかなかったという人たちの証言が大変多くありました。

猫に関しては、実は地震の直後にタンス、押し入れの中それから高いところ、例えば2階に上って行って、布団の間に隠れてしまうなどのケースが多くありまし

た。ですから、前にもお話がありましたけれども、猫は津波でそのまま流されるか、家屋の中だけが破壊的になっているところの柱を伝い、上に上に登って、9日ぶりに自宅に戻ったところ、ずっと家の隅に動かず猫が生きていた。何を食べて生きていたのだろうと急いで病院に連れてこられた患者さんもありました。ですから、同じ動物なのですけれども、地震の時の動きというのにそれぞれ大きな差があるということなのです。

ただ、その中でも驚いて外に飛び出して、そのまま行方不明、お互い離ればなれになって、その後、最長で6カ月ぶりに再会した飼い主さんと犬がおりました。このようなとても嬉しい話もその後たくさんありました。が、とにかくどんな時も何より呼んだらすぐ来る、戻ってもこれのように日ごろから育てていくということをはかっていたかと思いたいと思います。例えば、日常生活の中で、名前を呼んで見てくれたらお利口だねと言いながら褒めてあげ、お食事のときには、毎回“おいで”と言って、そしてお食事をあげるとか、飼い主のささいな毎日の行いが、実際このような災害になったときに役立つのではないかなというふうに思います。

それから直後、瞬時リードを装着、とにかく逃げないように、自分が抱いて逃げるために、リードをまずつけていただきたいと思います。リードの置き場所ですが、犬を飼われている方、猫ちゃんを飼われている方皆さん、散歩に行くために使うので玄関など、いつも決まった場所に置いてあると思うのですが。サブ的に、お部屋の中に何か所かリードを常に用意しておくという準備が必要なのではないかなというふうに思います。例えばクレートの上の取っ手のところにリードを結んでおく、常にクレートで寝かせてあげ、クレートでお留守番、そういうことをするときには必ずクレートの上にリードを結んでおくという習慣も必要なのだというふうに今回感じました。

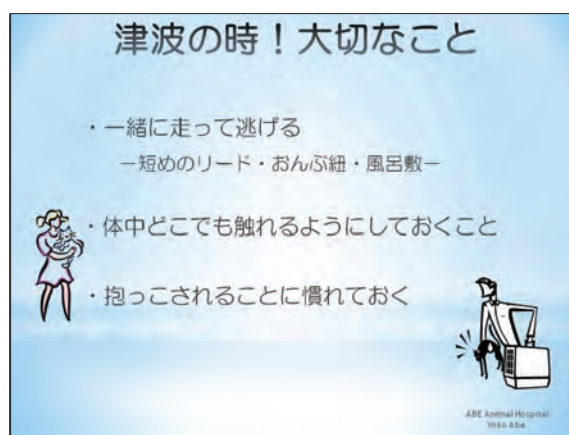
今回は、とてもすさまじい災害でしたけれども、その中できっと神様がくれたことというのは2時46分だったという、その時間帯だと思うのです。多分、すべてライフラインはとまりましたけれども、でも、明るかったんです。ですから、犬を助ける猫を探すのも、そのちょっとした時間で多分できたのだと思います。ところが、これが夜中でしたら多分もっと多くの方が被災されて、亡くなられたと思います。真っ暗な中で動物達もクレートも探すにもそこまで行くことはできなかったでしょう。そういう意味ではこの時間帯というのは、とてもラッキーであり、すざましく悲惨な状

況でしたけど、唯一神様からいただいた命のともしびを残すための贈り物なのかなというふうに私は考えております。

あとはクレートに入れることです。必ずクレートに入れて、夜寝るときとかですね。そのクレートは安全確保を確実にしていただきたい。例えばクレートをどこに置いてもいいというのではなくて、書棚から本が飛んできます。それから食器棚は思いっきり倒れます。テレビも壁つけとかでなければ飛んできます。すべてが横に揺れますので、できるだけ壁とソファの間で上部に何もないうところ、とにかく安全確保ということをまずは日ごろの中からやっていただけたらなというふうに、今回の経験で感じております。

サブリードを結んでおくということ、あとはコミュニケーションを日ごろからしっかりとれる関係であること。お座りとか伏せとか待てとかというのは、しつけのトレーニングの言葉だというふうに理解されている方が結構多いと思うのですが、決してそうではないということです。我が家は。大型犬が1頭いますので、その子をいざクレートに入れようと思うと、クレートはリビングのところではなくて隣のお部屋にありますから、そこまで連れていくという間にすべてものが落ちてくるという危険がありますので、いざというときに机の下に隠れて、伏せね、待てねという、日ごろからお互いがお互いの体をいたわり合えるようなコミュニケーションのすべとして、このお座り、伏せ、待てとか、コミュニケーションとして、多く使いながら生活してもらえたらなというふうに思います。【スライド5】

次に津波の際に、大切なこと。とにかく津波は一緒に走って逃げるしかないのです。本当に逃げるしかないのです。それもひたすら早く走ることなのです。そういう意味では短目のリード、短目にして握りとにかく走る、それからおんぶひもを使う。いろいろ種類はありますけれども、実は肩にかけてよくだっこするものがありますよね、それは、実際患者さん方に聞いたお話ですが、ボックス型のショルダーに犬を入れ走ったところ、腰のあたりでボックスが揺れて揺れて大変で、必死にそこから犬を出してだっこして、そのバックを投げて逃げたという方がたくさんいたんです。ですから、フィット感のあるもので、だっこをして逃げる、プラス両手はできるだけフリーということです。ですから、柴内先生が非常用バックを出されていますが、それは肩にすべてかけられますので両手がフリーになります。とにかく何が起るかわからないので、両手はフリーにしなが、だっこをして固定をして逃げるというの



【スライド6】

が最善の方法だと思います。

ただ、猫はなかなかだっこをして逃げるとなると、その途中でアクシデントが起こりうることなので、できれば猫も日ごろから手持ちのキャリーバック、それもやわらか目のキャリーバックに入れられるように、日頃から、生活の中でレッスンをし慣れさせておかれるといいのではないかなというふうに思います。

それから体じゅう、どこでもさわられるようにしておくことです。実は津波のとき犬を抱っこして走って逃げた、そしたら慌ててだっこして逃げたので手元の犬が水の中に落してしまった、足をすくわれて。そのときにあっと思って呼んで、犬が泳いで近くに寄ってくるのだけれど波の力がすごいので、そのまま耳をつかんで助けた。あとはしっぽをつるし上げて助けたという方が結構いたのです。しつけ教室のときに体じゅう何処でもさわられるようにしておきましょう。やってよかったわというクライアントがいました。なぜなら、助け上げたときに犬もびっくりして、お互いが嫌な思いをする。決してそうじゃないんです。しっぽを持たれても、耳を持たれても、とにかく飼い主のそばに行かなきゃという思いというのは動物にもすごくありますので、そういう点では日ごろからお耳とか、しっぽとか身体中を、優しくや少し強めにとか触ることをしながら、強目にとってもそんなに強目ではないですけど、いっぱい体じゅうどこでも触られるようにしていくということがとても大切なのではないかなというふうに、今回本当に痛切に感じました。

あとは日ごろからだっこすることになれておく。日ごろからちょっとだっこをして、そしておいしい御褒美をあげて、いい子だねと言いながら常にだっこをして、そしてとっさにそれを受け入れられる子にしておくということもとても大切であると思います。

【スライド6】

助産師さんなのですが、この方はおんぶひもというのを実際使って、津波のときに、ミルクちゃんだけをだっこして逃げたんです。津波には巻き込まれてしまったのですが……。そのときの状況を動画で。

(動画開始)

玄関にずっといたら、黒い波が低い位置からだんだん流れてきて、近所の人みんな逃げろと騒いで一緒になって逃げてしまったんだけど、そこのほうから1メートルぐらいの高さでもう2波が来てしまって、そこで洗濯機のように2人で黒い水の中をぐるぐる回って、そのまま流されてもうだめかなと、この子と一緒に死ぬんだったらしょうがないかなと、この子だけは離さないと思いました。それでもうこの子は鼻だけ出していました。そのまま流されて、近くにあった木にぶつかって、そのままそこに40分つかってました。その間、何度ももうだめだなというのがありました。本当に眠くなるような感じで、沈んでいく自分がいました。でも、子供たちのお母さんという声で浮き上がってくるという感じが二、三回ぐらいあって、この子も一生懸命、上に上にはい上がろうとして、でもこのだっこ帯のおかげでこの子は私から離れることはなかったです。

(動画終了)

ということです。彼女は実際40分後に陸に上げてもらったそうですが、足を骨折していました。そのときは全く痛みを感じなかったのだけれども、陸に上がったたら足が骨折してて、このミルクちゃんもかた目が白くなっていたと思うんですけども、ストレスによって一気に真っ白になったそうです。このおんぶひも、助産師なので、これは人間の赤ちゃんに使うひものだけれども、これがいいですよと。抱っこひもの隙間にはペットシートとか、少量のフードなども入れて逃げられますので、ぜひ、フィット感のあるものを選んでいただけたらなというふうに思います。

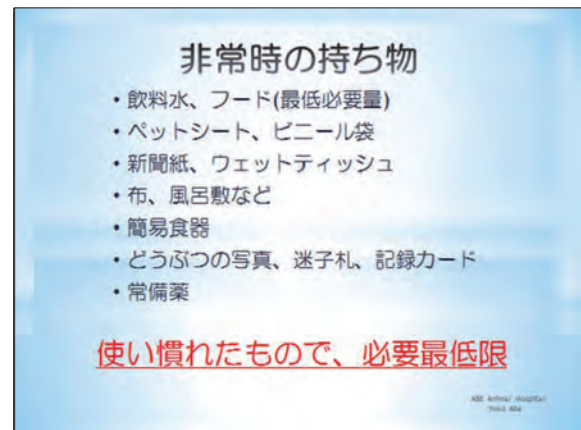


【スライド7】

ふろしきだっこというのを、この助産師さんから教えていただいたんですけども、人間の赤ちゃんもこのようにだっこするそうなのです、おんぶひもがないときに。実にフィット感があって使い勝手が良い。後で時間があつたらちょっとデモをしたいと思いますので、ぜひ使われるといいと思います。ふろしきは実際、避難をするときにぜひ1枚持っていたきたいんです。同行避難になったときに、動物たちの毛がとても嫌という方が結構多いんです。ですから、ふろしきであれば動物の大きさに合わせて首のところで胴のところを結んであげると抜け毛の予防にもなります。ふろしきというのはクレートの上にかけたりとか、それからもちろんその後すぐく余震があるものですから、地震恐怖症になってしまうわんちゃんとか猫ちゃんがたくさんいるのですが、そのようなどうぶつ達にも、本当にフィット感があって、胸に包んでだっこしてあげられるというのは安心感を持ってもらえると思います。

このように実際デモをして、写真を麻子先生デモで撮りましたが、我が家のオマケというわんちゃんなのですが、本当に何でもできちゃうのです、両手で。津波のときとか、避難で逃げるときもそうだと思うのですが、もしかしたらもう1人助けなきゃいけない、何かしなきゃいけないと。両手は必ず残しててもらいたいなというふうに思います。【スライド7】

非常時の持ち物として、先ほども申し上げましたとおり大丈夫だよというバッグを柴内先生が開発されましたけれども、内容は同じようなものです。ただ、ここにふろしきまたは布をちょっと入れてあげて忘れないでください。ここで見るとおりですが、大切なのは常日ごろ使い慣れた物を持って行ってほしいということです。常になれていると言ったら、普通の食器でしようということになるのですが、そうじゃないんです。簡易食器もそうですが、日ごろから月に何回とか、普通の生活の中で、ちょっと練習とレッスンの



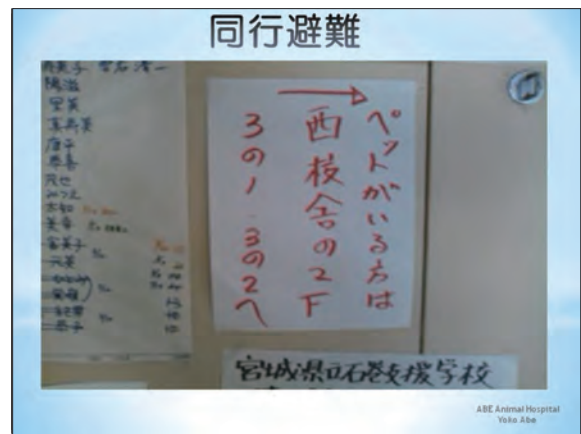
【スライド8】

ためにぜひ使ってもらいたいということなのです。

猫もそうですし、犬もそうなのですが、食器が変わると全く食べないという子が結構いるのです。被災地というか、避難所では皆さんが配給されたその器を動物の器に使っていたということなのですが、実際、こうやってもし事前に準備をしておくことができるのであれば、日ごろからちょっと非常の持ち出し袋をあけて、そして簡易食器だとか、準備したものを生活の中の一部としてちょっと使ってみられるということがとても必要なというふうに思います。いざとなると、すべて新しいものとなってしまおうとそれだけで動物は、ストレスを感じてしまいますので、使いたれたものということがとても大切になってくると思います。

それから持っていくのはあれもこれもではなくて、とりあえず必要最低限というふうに考えられるというのではないかなというふうに思います。石巻ではとても幸いで、同行避難というのが行われました。動物がいる方はいる方で、1年1組から例えば3の1から3の2、そういうふうに決められたお部屋もあれば、それから普通にそれぞれに分けられた中に動物が1頭いるというふうな分け方をされた避難所などそれぞれいろいろでした。石巻では同行避難が行われなかったところは、実際学校で2軒ありました。いいことばかりではなく、女川町では逃げるところが高台にある体育館しかなかったのですが、体育館にみんな入れられたのですが、体育館にはさすがに動物は、入れてもらえませんでした。その日は雪が深々と降りましたからその寒さのために飼い主は、チワワ2頭なのですが、そのこたちを抱っこして一晩外にいて、そのチワワ2頭が凍死をしたという悲しい出来事もあったようです。そういう意味では、本当にふるしきとか布を、暖をとるという意味でも、ぜひ持っていただければと思います。

同行避難、これは石巻中学校でしたけど、この子だけということなんです。震災によりすべての日常を失ってしまったんです。実はこのお洋服なんかもすべて支援物資なんです。その支援物資もお部屋にざぼっと、本当はやっぱりかけて選べればいいのでしょうかけれども、どんどん支援物資が入ってきますので、一つの教室がぼわっと山ほどあるお洋服でいっぱいです。そこからみんな選ぶのです。ですから、本当に大変な労力と人間としての誇りというものを多分失うと思うのですが、そのような中で靴下も左右反対を履いていたり、靴も支援物資ですから、全く反対の靴を、



【スライド9】



石巻中学校にて

この子だけ

【スライド10】



矢本第一中学校

手作りクレート

【スライド11】



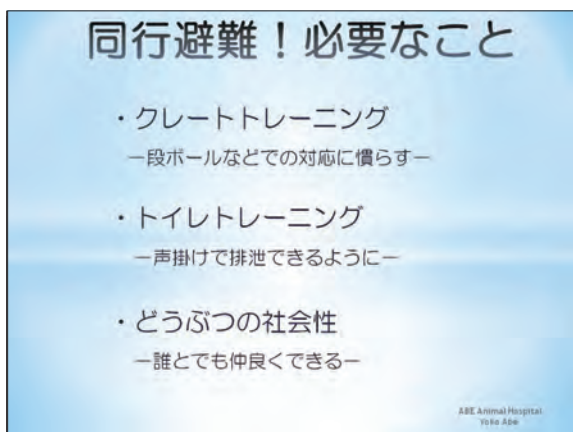
渡波小学校にて

“お散歩中”

【スライド12】



【スライド 13】



【スライド 14】

全く柄の違う靴を履いていたりとか、本当に日常すべてを失ってしまった状況なのです。けれど、助けた、一緒に逃げたこの子だけが日常のすべてということで、大変心の支えになっていると思います。

こうしてクレートなども当然必要になってくると思うのですが、クレートを持って逃げるというのはまず不可能なわけで、動物愛護団体とかから、支援物資で入ってきますので、それまでの間、矢本第一中学校の男性陣はすごいなと思ったのですが、愛知県日本赤十字社の毛布の支援箱で、クレートを手作りしていました。こんなふうに屋根もつけて、入り口もつけて、閉じられるようにこうやって、その子とともに生き延びるためにすごく創意工夫しながら生活をキープしていく、こういう温かさが石巻の方たちは本当に多くありました。私たちもこのように人と動物が共に生きる姿を震災直後に大変多く見ることとなりました。

これは猫ちゃんです。実はこの子は 19 歳なのだそうです。19 歳ぐらいになると動きもそんなに激しくはないので、どうやって逃げてきたのとお聞きしたら、いや～だっこのさと言って、そのまま着の身着のまま猫だけを抱っこして必死に逃げたらした方なのですけど、こうして避難所の中では、マナーを守ってリードをつけて、リードもこれは本当のひもなんですけど、

このひもをつけてお散歩に出るんです。そうすると、子供たちがみんな出てくるんです。おとなしい猫ちゃんなので、お利口と言って本当に避難所自体の心の支えになったと。動物たちの力って本当にすごいなというのを避難所回りをしてたくさん感じました。

これは理科室なのですけれども、実際のところ動物たちと一緒に避難した方というのは、理科室だとか、それから家庭科室とか、そういうところが私は理想なのではないかなというふうに感じました。なぜかというと、結構大きな机がありますよね、それぞれグループ、班で活動するのに。猫なんかも陰に隠れられるんです、人もそうなのですけど。ですから、ぜひ避難所では、どうぶつ連れの方たちは、このようなお部屋を提供してくださるのであれば、意外とこういう状況がどうぶつ達のストレスを軽減する一つの要因になるのではないかなというふうに思いました。子供さんたちがとにかく動物がいると喜んでいるのです、もちろん親御さんたちもそうなのですけれども。本当に共に生きるということはこういうことなのだなというのを痛切に感じました。【スライド 9-13】

ちょっと避難所のお話です。

(動画開始)

地震から津波までは 40 分ぐらいあったと思うんですが、何もできないまま、あっという間に津波が来たという感じで、高い山にこの子をこのままの状態ですこして、最終的に気がついて手元を見たら、この子のお散歩用のバッグだけしか持ってなくて、もっといっぱい大事なものをかばんに入れて持ったはずなんですけど、手にかけてたのはこのバッグ一つで、コタロウの診察券とか、おしっこシートとか、リードとか、津波が行った後に気づいたらそれしか持ってなくて、避難所はだれでも受け入れてくれるでしょうけれども、ペットはどうなんだろうということだけが頭にあって、この子だけ受け入れられなかったらどうしよう、そのことばかり考えて、そのときは私はこの子と一緒に車で過ごそうとか、何かいろんなことを考えて歩いて避難所に向かい、避難所の方が、玄関先で何名ですかと主人に聞いたんです。そのときに主人がうちは 6 人と 1 匹ですって堂々と言ってくれたんです。ごめんなさい。みんながこの子のことを家族とっていてくれるという、6 人と 1 匹ですというその言葉に救われたというか、うちの家族はやっぱりこの子も家族とってくれるんだと。

(動画終了)

コタロウ君は避難所でとってもアイドルだったそう

です。南三陸町というところにこの方は住まわれてて、避難場所は体育館だったのです。何か畳1畳が2人なんですかね、その割合で家族6人分のエリアをいただくそうなんですけど、そこのエリアから隣のおばさんのところに行こうとすると、ワちゃん違うでしょうと言うとびよこびよこ戻ってきて、そして日ごろお教室に通われてた方なのですけれども、このようなところで本当に役に立つとは思わなかったというお話もしてくれました。家族の方の理解がなかなか得られなくて、結構苦労して育てられたんです。そこでお父様がそんな言葉を言ってくれたのがとてもうれしかったというふうに話しておりました。ワちゃんも本当にお利口だったので、避難所のアイドルとしてずっと生活して、今は仮設住宅で生活しています。

同行避難に必要なこと、クレートトレーニングです。絶対クレートトレーニングはなさってください。おうちでお留守番のときも、そのまま出していくという方が結構おられるんです。ですから、そうではなくて、必ず夜寝るときも、とにかく安全確保、そして安心して快適で安全なんだよと思えるその空間をしっかりと、飼い主の責任として提供してもらえたらというふうに思います。同行避難のときにも、それからが大変なんです。避難をして避難所にいたときに、例えば、配給をもらいに行く、それからあとは当番制になってくるのです、避難所生活が長丁場になってくると、どうぶつだけを置いて自分がお仕事をしなきゃいけない、周りめぐっての当番だと。そのときにクレートに入れて布をかけていたら、とってもよかったですという。このことは、本当に社会の一員として、共に存在するという証だと思います。

あとは、トイレトレーニングですが、実はこれは声かけで排せつできることがとても大切になります。例えば盲導犬なんかそうなのですが、ワンツー、ワンツーとか、声かけで排せつをするように教えるのですが、そのように教えてあげられることを望みます。なぜかという、先ほど、院長もお話しましたが、ヘドロと瓦れきだらけで、お散歩はもちろんのこと外に出ることは全くできないのです。人も長靴を履いて出るしかなくて、長靴を履いてもくぎがささったりとかがありますので、できるだけ室内で声をかけたら排せつをするというようなトレーニングを常にしていけるといいのではないかなというふうに思います。

それから何より大切なのが動物の社会性です。社会化教育というのはとっても大切です。だれとでも仲よくできること、だから小さいうちからいろんな環境の

中で、そしていろんな経験をさせながら、豊かな犬性だったり、猫の生活だったりを送らせる努力を飼い主がぜひしていただけたらというふうに思います。

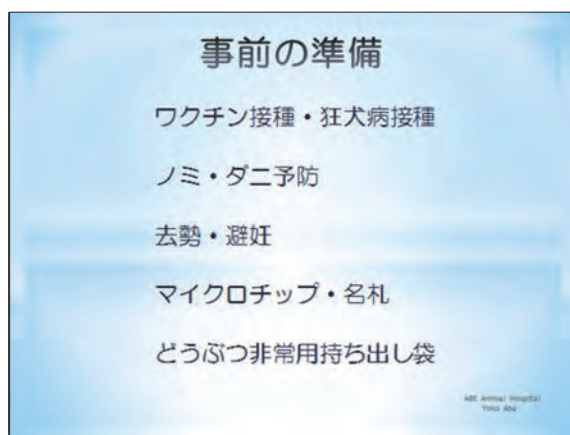
【スライド 14】



【スライド 15】

これは我が家のわんちゃんたちですけれども、避難所には配給物資などが入ってくる段ボールがたくさんあります。ですから、段ボールに入って、そこで寝られるように、当面。すぐはなかなかクレートの支給はないので。こんなふうに、日ごろから遊びの中で段ボールで暖をとれます。そして、こうやっていれば安心してきますというふうな形で、ちょっと段ボールなどで遊び感覚から始められてはいかがでしょうかということです。

避難所内での他の人たちとのセパレートにも役立ちます。【スライド 15】



【スライド 16】

事前の準備としては、先ほど院長もお話しましたので、このとおりのことです。ただ、ノミ・ダニに関しては、意外と避難所で、猫を毛布の中に飼い主さんが入れて、暖をとりながらという人が結構多かったのです。ですから、そこで例えばノミ・ダニの予防をしていないと、避難所じゅうに蔓延してしまうということにもなりかねないので、どうぶつ達同士で。ですから、当然ノミ・

ダニ予防は、日頃からしておくことが必要かと思えます。【スライド 16】

それから、避難所以外で生活するどうぶつ達もおります。その理由というのは、不慣れな環境での生活で起こるストレスです。吠える、鳴く、咬むなどの問題行動がある場合、このようなことがあるから、飼い主自身の気遣いがあるって、無理をしながら車中で生活を強いられることになってしまいます。日ごろから飼い主の方たちがどうぶつ達の問題行動に対する真摯な気持ちでの解決法、解決するための努力というのを常に持つべきではないのかなというふうに、今回もまた痛切に感じました。【スライド 17】

仮設住宅の訪問を今、支援としてやっておりますけれども、こんなふうに Ann Project のシールをつくっていただいて、このシールを仮設住宅でどうぶつと共に生活している世帯の玄関口、ポスト、などに張ってもらいます。そうじゃないと、私は方向音痴もそうなのですが、本当にどこのお宅なのかわからなくなります。同じ建物が同じ列、相当な数が並んでいますので、ヒアリングをして、そして仮設住宅の支援をオーケーしていただいた方にはこうしてシールをお配りして、玄関のところに張っていただいています。そうすると、私がまた尋ねたときに大変入りやすいのです。このようにして定期的に回っております。そして、各仮設住宅、すごい果てなく多いのですけれども、まだこれからヒアリングも続きますけれども、班長さんというのを決めさせていただいています。そしてその班長さんがその仮設住宅のどうぶつ達の出入りとか、動物たちの状態とか、問題などをちょっと把握していただいて、そして私のところに電話をかけてくれるというふうに、各仮設住宅に班長さんを設けました。そうすると、このポツ君のお父様も仕事を失っていますので、じゃあお願いしますねと言ったら、任せといてと、やっぱり何かやる必要があります。仮設住宅でも、そして動物とともに何かをやる仕事、そういうことがとても必要になってくると感じました。

ポツ君ですが、ポツ君は、仮設住宅の支援を始めたきっかけになった犬です。吠えて、吠えて困ってしまい、体育館脇につないで置いて、自分たちは仮設におり、そして通いながらえさをあげて散歩をしているということで、去勢もしてなかったのでお預かりして、クレートトレーニングも病院でトレーニングを行い、そして連れて帰ったのですが、そしたらクレートもちゃんと入れて、じゃあ、こうして生活をしましょうねと。そしたら、おうちの中で暮らせませますねと喜んだのですけ

避難所以外で生活する理由

(在宅・車中など)

- ・ 不慣れな環境での生活で起こるストレス
- ・ 吠える・咬むなど問題行動がある場合
- ・ 飼い主自身の気遣い



【スライド 17】

仮設住宅訪問



Ann Project どうぶつ仮設住宅支援

ABE Animal Hospital
Yoko Abe

【スライド 18】



ABE Animal Hospital
Yoko Abe

【スライド 19】



女川第一中学校 仮設住宅にて

ABE Animal Hospital
Yoko Abe

【スライド 20】

ど、次の日、お父様から電話がかかってきまして、どうしたのかなと思ったら、いや、先生申しわけないんだけど、ポツのクレートを置くとも息子2人が寝れないんだよという話なんです。

ですから、どうしよう、クレートはお返ししたいということだったのです、絶対ポツ君にはクレートが必要だったのですが、そこは状況が状況なので、じゃあ、何か考えようということで考えたのが、ポツがこうしていつもお父様のベッドの下によく隠れてたそうなんです、寝てたそうなんです。ですから、そこをクレートにしてみようかという話をしまして、そしてお父様が設計して、作ってくださったんです。かぎもちゃんとつけてね。お留守番のときには、ここに入れて出かけるようにしましょう。とお約束をしました。ここにちゃんとかぎがあるんですけども、こんなふうにして手づくりのクレート、ちょっとポツ君にしたら狭いかもしれないんですけども、そこはお互いともに生きる家族として、お互い我慢はしなきゃいけないねということで、今、こんなふうにして生活をしています。

【スライド 18-21】

ひびき工業団地の彼女は班長ですけど、このように一緒に仮設内を回ってくださるんです。ですから、すぐ仮設住宅の方たちの励みにもなっていると思います。暖かくなったら班長会議を今度開こうと思います。そのときには、仮設で動物と一緒に生活していない方もぜひ一緒にお誘いをして、班長会議を開きたいなというふうに私は思っています。それぞれに意見を聞きながら、じゃあ、お互い妥協点を見つけながら、良いコミュニティーとして仮設住宅生活が終えられるようにと考えています。【スライド 22】

新しいコミュニティーもこうしてできてくるわけです、わんちゃんがいることによって。皆様からいただいた御支援で、フェンスなどもこうして各家庭に取り付けに行っております。それからマナー教室も、仮設住宅で時間がとれるときにやっております。皆様方からたくさんの御支援をいただきましたが、このような形でどうぶつ達にしっかりと伝わっているということです。仮設住宅生活においても、それぞれの時期でそれぞれのニーズというのが変わってくるのです。去年の後半ぐらいからは、津波で必死になって逃げてきて、首輪に気がついたとき、塩で首のあたりが皮膚炎というのが結構多かったのです。とにかくシャンプーがしたいということで、私は東北愛犬専門学院で授業をさせていただいていますので、学校のトリマー科の先生方が協力をしてくださり、月1第4日曜日にこうして仮



仮設住宅での手作りクレート

ABE Animal Hospital
Yoko Abe

【スライド 21】



ひびき工業団地 仮設住宅にて

ABE Animal Hospital
Yoko Abe

【スライド 22】



矢本グリーンタウンにて “新しいコミュニティー”

ABE Animal Hospital
Yoko Abe

【スライド 23】

設住宅のシャンプー巡回を実現し、プロジェクトにも入れることができました。本当に皆さんの協力のおかげで、こうして石巻のどうぶつ達が一生懸命生き延びています。命を繋いでいます。【スライド 23】

仮設住宅の生活はこのような形で被災から避難所、車中、親戚のお宅、などめぐるしい環境の変化を経てやがては仮設住宅に移行していくわけですが、どんな状況にあっても、飼い主と一緒にいると安全で安心で快適で楽しいんだよというように育て方を日ごろからなさっていくということがとても大切になると思います。ですから、上手に褒めながら、教えていく



女川町清水

“みんなでフェンス作り”

ABE Animal Hospital
Yoko Abe

【スライド 24】



仮設住宅でのマナー教室

ABE Animal Hospital
Yoko Abe

【スライド 25】



仮設集会所での支援助物資配給

ABE Animal Hospital
Yoko Abe

【スライド 26】



【スライド 27】

陽性強化法というのは、災害時にもお互いの思いやり、お互いがお互いの体をいたわり合うとか、わんちゃんにとっても猫ちゃんにとっても安心だよというふうな気持ちになってもらえる信頼を育てる大切な教えの方法であると思います。このように育ったどうぶつ達は、ストレスの軽減と、それから新しいコミュニティの中でどうぶつ達とはぐれてしまった人、どうぶつ達を今まで家族の一員として迎え入れなかった人たちが、どうぶつ達に癒されるという形になってくるのではないかなというふうに思います。【スライド 24-26】

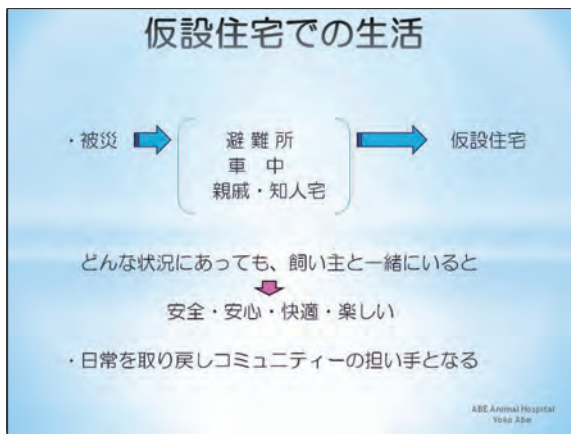
それから日常を取り戻し、コミュニティの担い手となる、新しいお友達関係がどうぶつ達を通して避難所でも広がってありました。そういう意味では、本当にどうぶつ達の存在というのはともに生きるのだけれども、かけがえのない存在なんだよということです。先ほどの写真でシャンプーした G.R なのですが、仮設を回ったころはこんな感じで、塩水を浴びて本当にやっと逃げてきたので汚れています。それでも体をふいてあげたんだよ。泡のシャンプーなども支援していただきましたので頑張っていたのですが、さすがにやっぱりきれいになりますよね。シャンプーというのは。私たちもお風呂に入るといことはとても気持ちのいいことですが、ほらこんな気持ちのいいお顔で、こうして写真を撮らせていただきました。【スライド 27】

それでは最後になりますけれども。

(動画開始)

うちにいたんです。本当にいよいよ何か様子がおかしいぞと思ってたら、もう大きな津波が来て、御近所さんが流れる中、おうちがぶつかったり、ぶつかられたり、水にみんな流れて、持ってたリードもとにかく離してしまって、みんながばらばらに投げ出されたんですけども、私は流れてきた建材のくぎにささって、ちょっとひっかかった感じで瓦れきのところから余り遠くに離れないで済んだんです。お父さんのほうが先にはい上がってきて、抜いてくれて、引っ張ってもらって、流れ着いた先がたまたまホテルさんのところで、そこに避難させてもらって、マルのことはほとんどだめかなと思ったんです。

一夜明かして、夜が明けて、外に出た人が、何か黒い犬でリードついたままの犬がいる。マルちゃんじゃないのと言われて、ええと思って見に行ったら、やっぱりマルだったんです。もうどろどろ状態で。会ったときはうれしかったです、本当に。無傷だったんでね。食べるものもないときですから、えさももちろんないし、いろんなものを拾って、汚れてない、食べれそうなも



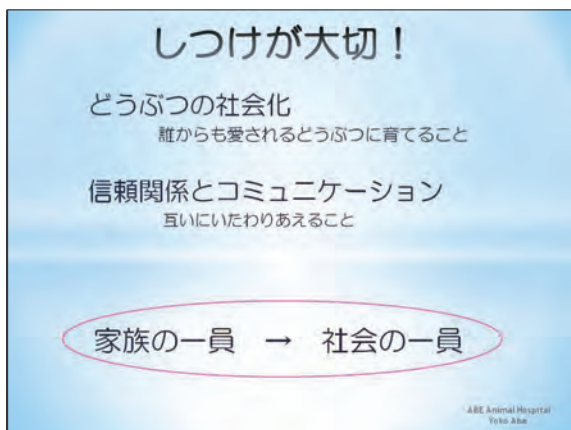
【スライド 28】



【スライド 29】



【スライド 30】



【スライド 31】

のを3人で分けて。

袋があいてなければね……。

ポテトチップみたいなやつ。

サトウのごはんが……。

そうだね。

あいてないのがね。

サトウのごはんを無理やりあけて、あつためないで食べさせて。避難所でいたにしても、私たちの場合でもお世話になるというときに、しつけがきちんとできているか否かでは、やっぱり周りへの気遣いだとか、あとは周りからの反応だとかということにも大きな影響があると思うんです。本当にしつけだけはきちんとお互いのためにしておくべきだというのは痛感しました。

【スライド 28-30】

(動画終了)

ということで、どんなときでもですけども、本当にしつけが大切だということです。どうぶつ達の社会化、私はいつもお教室でクライアントの方にお話をするのですけれども、何よりもどうぶつ、犬の幸せというのは、だれからも愛されるどうぶつ犬に育てることなんだよというふうにお伝えします。ひとりよがり自分で好きな犬種を選ぶところから始めて、そして自己満足で絶対育てないようにねということをいつも伝えているのです。それから大切なのは、互いの信頼関係とコミュニケーションです。互いに互いの体をいたわり合えるような、そんな関係を育てていこう、育てていきましょうねというお話もします。ですから、今回の災害時において、日常でももちろん大切なのですが、特にこういうときだからこそ、このように動物のしつけをしていたことがとても役に立ったよというお話をたくさん聞いたことが、私にとってはとても嬉しいことでした。【スライド 31】

家族の一員から社会の一員として育てていくことがとても大切なのではないかなというふうに今回の災害で痛感いたしました。飼い主の皆さんもいざ避難所に





【スライド 32】

は行ったけど、入れてもらえなかったとか、だめだったとか、そういうことではなく、まずは飼い主自身がやれることをしっかりとやった上で、そして同行避難ができるというような確信のもとで、大切に大切にどうぶつ達と時間を過ごしてもらえたらなというふうに思います。

ポン太君が仮設住宅支援の一番初めの子だったのですが、今回のように共に生きるということですが、まだまだ石巻とともに生き延びるといふ、本当に現在進行形の状況の中です。ですから、そういう意味では、これからも長丁場ではありますけれども、支援をしていきたいなというふうに思っています。

ポン太君からですが、御清聴ありがとうございました。生きてることに感謝。どうもありがとうございました。

○藤田座長

どうもありがとうございました、先生。

より具体的なお話で、皆さん参考というか、飼い主として参考になられた点が多かったんじゃないかというふうに思います。逆に、先生、しつけができてなくてトラブルのようなことも同行避難の場合は起こっているんですか。

○阿部容子先生

そうですね、やっぱりほえるとか、そういうので周りの方がうるさいということで、外でつないでえさだけをやりに行くという状況なんかもありました。

○藤田座長

わかりました。何となく自分も飼い主として身につまされるお話だったなというふうに思いました。

先ほど、阿部院長もお話されていたんですけども、実は石巻の今の活動はある意味最先端の活動でありますし、2人のお話をお伺いしていると、社会の成熟度というか、犬のしつけの問題も含めてだと思えます。

ども、ふだんの社会の成熟度というのがこういうときに本当に試されるんだなというのが、すごく生々しく具体的にわかるお話だったのではないかなと思います。

阿部先生がおっしゃられていましたが、被災という意味では、16年前にこの神戸という町は大きな震災に遭っています。神戸の動物愛護の団体の方々とか、獣医師の方々のアドバイスが、今回石巻でも生かされたそうです。

私も、今回は気仙沼に取材に行きましたが、被災地に入っていくと、すごく人々がペットを探している方に本当にたくさん会ったなと思います。まだ、かなり危険な状態でも、犬を探しに被災地に入っているという方々の姿を見まして、犬というものの存在、被災地での動物たちと人間とのかかわり合いというのが、重要になってきているのかなと思いました。

そうした意味で、先輩でもあり、ある意味、先端を行っているのが神戸だと思うんです。

次には、神戸で動物管理センターの人で獣医師を務めていらっしゃる湯木麻里先生に、じゃあ神戸の町で今、どんな問題が起きているのかというお話をお伺いできればなと思います。どうぞよろしく願いいたします。